

[日時]

2020年1月10日(金) 17:00~19:00

[司会・進行]

山口秀文(助教)

[担当学生]

竹本匠吾 泉亮太郎 清水紗英 宅野蒼生 田中惇 朴相修

檜垣裕一 永本聡(M1)

神戸建築学 第45回

## 「建築の時間」

近井 務

株式会社大林組設計部門統括部長

## 講義概要 「建築と時間」

建築学とは「シェルターをつくること」であるが、社会情勢や経済価値、クライアントの要望等の建築を取り巻く諸条件のみを考えるとその本質を見失うことがある。そうならないためには、建築を常に別の視点で俯瞰することが必要である。その中でも今回は「時間」というフィルターで建築を考えていきたい。

## 『時間』の概念

時間の流れにはさまざまな形式があり、近井氏は時間の流れを建築に置き換えることで説明を行った。最も一般的な時間の捉え方であり、直線的に進むアリストテレスの時間、線分的に進む生物学的時間がある。これを建築に置き換えるならば、前者は現存する建築作品であり、そこで使用者とともに直線的な時間を経ていく。後者は実現しなかった建築であり、これらは実現しないことが明らかになると時間が終わることになり、これらを構想した思考や時間は設計者にのみ蓄積されることになる。

振幅を持って進む波動的時間と、スイッチバックのように繰り返しながら進む逆行的時間も存在する。これらは改修などによって異なった機能、つまり別の時間軸が与えられた建築として置き換えることができる。ここではガス供給施設を集合住宅へと変換した例を紹介した。

また、スパイラルに進む時間も存在する。これは異なる時代に異なる建築が設計を行うことで、建築にはスパイラル状の時間が流れることになり、例として200年間かけて建築行為が行われたローマのスペイン階段を挙げた。

「哲学と時間」の関係が、近井氏が建築と時間の関わりを考え始めたきっかけであった。ここでは時間と空間の広がりや、過去の収束点である現在を点として未来は無限に広がっていくことを示した、ミンコフスキー空間によって説明を行った。

## アンビヴァレントな『時間』

アンビヴァレントとは、ある事象に対して相反する感情や価値を持つことで、両面価値と呼ばれる。ここでは時間概念についてアンビヴァレントな項目を説明していく。

まず、連続と不連続についてである。西洋と日本の歴史において主要な建築物をプロットし、西洋と日本における建築の違いについて考察を行う。西洋の建築は複数の時代にまたがり建築が行われることで、連続的、直線的な時間が流れ、一方、日本では伊勢神宮の式年遷宮のように常に新しいものに更新されることで反復的、円環的な時間が流れる。しかし、アメリカの建築理論家チャールズ・ジェンクスの年表から建築史におけるゲームチェンジャーを示すことで、両者の違いは20世紀から21世紀にかけて近



近井 務 | Tsutomu Chikai

株式会社大林組設計部門統括部長

1957年香川県生まれ。1982年 神戸大学大学院工学研究科修士課程修了。

同年株式会社大林組 入社。1990-1992年 Studio Mario Bellini (Milano)。

現在 設計部門統括部長。

&lt;主作品&gt;

神奈川県立保健福祉大学(BCS賞・公共建築賞優秀賞)

桑沢デザイン研究所(グッドデザイン賞)

資生堂ビューティアカデミー(グッドデザイン賞・SDA賞)

神戸製鋼所本社(神戸市都市デザイン賞)

MBS毎日放送新館(大阪都市景観建築賞)

南海電気鉄道本社+ZEPP Namba Osaka (大阪都市景観建築賞)

東大阪市民会館

KOBELCO 摩耶ゲストハウス(THE INTERNATIONAL ARCHITECTURE AWARD)



似化していくことがわかる。

次に客観的時間と抽象的時間についてである。前者はアリストテレス的時間であり、すべての建築が建設中や完成後にプロセスとして必ず経験をする。後者は印象的な時間とも考えることができ、人の感情などによって時間の経過速度が大きく異なる。前者を直線的时间とするならば後者は円環的時間としてとらえることができる。

また、アナログとデジタルも時間において二項対立的な側面を持っている。デジタル化によって時間の概念は一変し、物理的な距離や言葉の壁、国境でさえも小さなデバイスを通して飛び越えることができるようになり、建築というものが情報の一つとして見られるようになった。いずれは、AIによるデザインが行われるようになり、建築学を学ばずとも建築設計を行える日が来るかもしれない。ただ、デジタルなデザインでは人の感情や時間を建築に織り込むことは永遠に不可能であり、そこに建築家の意味が生まれるであろう。

### 『時間』の概念から建築へ

これまでに近井氏が訪れた建築や設計に携わった建築を、時間を通して考えていく。

建築は時間、クライアント、場所がすべて異なる唯一のものであるが、同じ時間を共有するという側面も持つ。建築の持つ「同時性」を素材としての「コンクリート」や、建築設計における永遠のテーマの一つである「光」、建築のみならず自動車や家電、衣服など全てのプロダクトに共通する「白の实在」へと、時間を考慮した視点から紐解いた。

また増設などによって建築が新たな時間を経験する「時間の併存」、建築の場におけるアイデンティティである「場所性と時間」、建築の「象徴性」を、建築における時間の「包摂」であるとした。

建築設計において時間の経過を経ても変わることのない究極のデザインを「Timeless」デザインとした。軸線を複数持つことによって異なる時間軸を持つ「異軸の共存」、ガラスを用いるだけでなく、空間の奥行や面の連続性による感覚的な「透明性」、時空間を構成してきた建築がもつ、人を受け止めるための空間である「広場」、これらによって「Timeless」は成立するのである。

最後に、近井氏は『時間をデザインする』ことについて語った。

「変貌を遂げる社会や経済、業界の再編など様々な状況の変容に伴い、将来の組織環境がいかなる様相を呈しているかは誰にも正確には語れない。明らかであるのは、建築は大きな可能性を持つ創造的な行為であり、これからも人の暮らしに必ず貢献していくものであり、私は今後もそうでありたいと思っている。」

我々は事前学習による建築学当日のレジュメを作成するにあたり、近井先生の「二項対立」による建築設計手法に注目した。例えば、「地と図」や「美学と力学」がそれにあたる。その二つの概念を一つのカタチで表現できるのが、建築のもつ力なのではないかと感じていた。日本と西洋の時間の概念が異なることは知っていたが、建築にもその概念が現れていることを知った。建築は必ず時間という制約を受けるが、時間に依存しない建築を近井氏はTimelessと定義し、そこに向かって現在建築設計を続けているとのことである。

そしてその時間に依存しない建築というのは、AIや技術の発展によりデザインが人の手によって生み出されることがなくなっても、人間の感性に直接訴えかけることのできる建築なのではないかと考察する。なぜなら人間が持つ感性は時代を超えても変わることのない不変のものであるからである。

そして時間の概念は大きく分けて2つあり、「物理的な時間と人々の記憶の中の時間」である。これは私の研究室でもテーマにしていることある。もし、建築がなくなったとしてもそこを利用して人々の中にある記憶は生き続ける。それほどまでに建築は社会性を持った実学の学問であるということを実感することができた講演会であったように思う。

最後に「建築の時間」というタイトルであるが、時間に限らず予測が難しくなる未来に対して不変のもの、時間に依存しないものは何であるかを明確にし、大切にしながら設計に取り組むべきなのではないかということを感じさせられた。（竹本匠吾）

